
話題提供 1

五箇山の生活景

くろだ のぶ
黒田 乃生

筑波大学大学院教授。京都大学農学部を卒業後、東京大学大学院などを経て、現職。世界遺産保護や文化景観学についての教育・研究に従事している。文化庁文化審議会専門委員をはじめ、各地の文化的景観にかかわる専門委員に数多く関わる。



皆さん、こんにちは。筑波大学の黒田と申します。私は五箇山の紹介をしたいと思います。皆さん五箇山にいったことがある方はどれくらいいらっしゃいますか。(会場挙手) ほぼ全員ですね。そうしたら、五箇山出身の方はおられますか。お二人ですね。ありがとうございます。五箇山出身の方には当たり前の話かもしれないので、違っていたら後でご指摘をぜひお願いしたいと思います。

皆さんご存じのように、五箇山は世界遺産なので、世界遺産登録の話をも最初に簡単にしてから、世界遺産以外にもいろいろあるという話、最後に私が大学で少し関わっている五箇山の活動の話をご紹介したいと思います。

1. 世界遺産登録と合掌造りの建物

これは曾我忍さんという方の写真集からちょっとお借りしたもののなのですが、五箇山というのは皆さんもご存じのとおり、大変雪深いところにあります。これは三笑楽酒造という五箇山のおいしいお酒を造っているところのおばあさんの写真です。

この写真に私はすごくびっくりしたのです。昔は女性の方がこうやって雪の中を歩いて、五箇山から城端へ郵便物を運ぶような雪深い場所でした。この写真を五箇山の方に見せると、「ああ、これは何とかのおばあさんや」などと言っているの、この「郵便通送隊」をされていた方がまだいらっしゃるようで、近い歴史なのだということに感動します。

五箇山はなぜ世界遺産になったのでしょうか。合掌造りは皆さんご存じですよ。

建物がどんどん減っていったのが昭和 60 年代からです。これは籠渡（かごど）と来栖（くるす）という五箇山の二つの集落の合掌造りの数ですが、みるみるうちに減って、なくなってしまったということがこのグラフから分かると思います（スライド 1）。

合掌造りをなくしてはいけないというので、そのときに建物が残っていた相倉と菅沼が、史跡という種類の文化財になりました（スライド 2）。そのころはこういう文化的景観といった文化財の種類がなかったので、史跡になったのですが、それが世界遺産になる前段階だったのです。このときは歴史環境を保存しようということで二つの集落が史跡になったわけです。

同時に観光目的地にもなりました。修学旅行生がたくさん五箇山に来て、受け入れたり、あるいは女性誌に取り上げられて、女性の一人旅の目的地になったりと、だんだん全国的に有名になっていきました。

世界遺産登録後、今年で 20 周年なのです。五箇山でも、白川郷でも、20 周年のイベントがいろいろ開かれています。文化的景観という種類の世界遺産ではないのですが、人が暮らしている集落としては日本で初めて世界遺産に登録されました。そこから 20 年たったわけです。

合掌造りの建物を支えている植物は、例えば屋根に使う「ねそ」といいますけれどもマンサクの木や、雪の重みで曲がったスギを建物の構造に使ったり、カヤやアカマツなどです（スライド 3）。地域の自然がぎゅっと詰まった建物なのです。

これは相倉のだいぶ上の方に行ったところの茅場です（スライド 4）。カヤにこだわりのある方がおられて、急斜面の山奥で丹精込めてカヤを作っています。

これはおまけです。合掌造りの数がどんどん減ったという話をしましたけれども、合掌の屋根を下ろして、大きい茅葺きの屋根はないのですが、1 階の構造が残っている建物がたくさん五箇山にあります。見ていただいても分かりますけれども、大きな根曲がりの立派な部材が残っている建物がたくさんありますので、こういうのはぜひ調べて把握しておいた方がいいのではないかと思います（スライド 5）。

2. 世界遺産だけじゃない、五箇山の魅力

私は時々五箇山に来ていますが、いろいろな五箇山の魅力があります。それを少しご紹介したいと思います。

まず、赤かぶです（スライド 6）。これは有名ですよ。今、赤かぶの種を買うと、アメリカで作ったような種が売られています。五箇山の西さんという「合掌の里」の支配人の方は、非常にアイデアマンで、彼が在来種の種が残っているのをもらってきて、交雑して品種が狂ってしまうと駄目なので、交雑しないようなものすごい山の上で焼き畑を復活させて、赤かぶを作っています。これは食べるとぴりっと辛くて、とてもおいしいです。

あとは山菜です。私は非常に中途半端な都会育ちで、山菜をあまり知らずに育って

いるのですけれども、五箇山の方の山菜にける情熱にはびっくりするというか、「今日は早朝からこれを採りに行って」とか、「こういうのがおいしい」とか、知恵がいっぱいで、非常に勉強になります。五箇山の方にとっては割と普通なのかもしれないですけれども、都会から行くとびっくりするようなことがあります。

あとは、何ととっても芸能ですね。これは今年の授業で行ったときのこきりこ祭りの様子です（スライド7）。左は東田さんとおっしゃる方なのですけれども、「合掌の里」で普段バスを運転したりしている方です。その方が学生をバスで送ってくれて、そのまま麦屋節を踊ったりしているのを見て、学生もびっくりという感じです。

五箇山では日常に芸能が染み込んでいます。これは地域の方と学生との交流会の様子です（スライド8）。小さなお子さんもこきりこを踊れて、大人は三味線を弾いて、その場で芸能がどんどん始まります。非常に楽しくて、日常でみんなできるということにすごくびっくりしますね。

先ほど古いものから新しいものへ変化するのが文化的景観という話がありました。五箇山の楮（こうず）という集落の方が中心になって、ING というバンドを作っていて、「稲刈りの歌」などオリジナルソングをこの間も披露してくださって、大盛り上がりしました。YouTube に出ていますので、ぜひ皆さん見てみてください。耳にしたら離れない「稲刈りの歌」です。

こんなふうに、いろいろ形を変えながら、音楽や芸能に親しむことが現在まで続いているのが非常に面白いと思います。しかもものすごくレベルが高いというのが感動的です。

あとはご存じ、五箇山和紙です。これも宮本さんなど五箇山の方が伝統的なやり方で和紙をつくっておられますし、ほかにも少しずつ新しい方法を入れながら和紙作りをされているところもあります。

これは「和紙の里」で和紙すき体験をしているところです（スライド9）。この方は別のところで先生になってしまったのですけれども、こういう方も晩になると普通に三味線を持って芸能をやるところが面白いです。

私も使っている五箇山和紙製品も、古いものだけではなくて、どんどん新しいデザインを取り入れて、いろいろプロモーションをしています。

もう一つは、先ほど見えない価値のところでは信仰という言葉が出てきましたけれども、芸能もすごくびっくりするのですけれども、何ととっても本当にびっくりするのは日常の中に信仰があることに驚きました。

去年、私のゼミの学生が、五箇山にたくさんある念仏道場の研究をしました。皆さんは富山の方が多いのでわかると思いますけれども、念仏道場は浄土真宗を普及するために集落ごとにある、お寺ではないけど家でもないような集会所兼お寺の機能を持つ場所です。それがどれくらい残っているかを調べました。これは相倉にある道場で、世界遺産の中にあります（スライド10）。

小さい合掌造りみたいな小屋で、中に入るとちゃんとお寺のようになっています、皆さん今でもお参りをされています。

これは利賀です。次にお話しされる野原さんは、砺波市の教育委員会なのですが、利賀のご出身だそうです。今の南砺市の市長さんは利賀村出身の方で、代々道場守というお坊さんのローカル版みたいな感じの家の方なのですが、そこのかたです。ここももとは道場で、寺号を取得してお寺になりました。

外見はこんな感じなのですが、中に入るとびっくりするような豪華な仏壇があって、信仰が日常に深く根づいているのだなと感動したのが去年の調査です。今でもいろいろな報恩講や行事を継続しておられて、人口は減っている中でもそういう仏教行事と道場を大切に守っているところが素晴らしいと思います。

これは報恩講料理です。これは50年前の本から取った写真なのですが、昔はこうやって集まる機会が少なくて、こういう仏教行事のときにみんなで集まって、ごちそうを食べるのが何よりの楽しみだったということです。去年の調査によると、今はちょっとずつ形が変わって、だんだん簡略化されているのですが、今も続いているのが素晴らしいところです。

これは去年、楮の小林さんという家の報恩講に参加させていただいたときのお料理です（スライド 11）。こんなふうに信仰と料理と、その食材はもちろん地元のものが多いですし、いろいろ結びついているのがすごいところだと思います。この料理もそれぞれ意味があって、面白いところです。下の赤かぶの煮物は、私が一切れ食べているので、完全な姿ではないのですが、これが報恩講の料理です。

3. コーリャク隊

私は毎年五箇山で授業をしています。最後に少しその取り組みをご紹介します。

コーリャク隊というのですが、コーリャクというのは力を合わせると書きます。いろいろな作業をみんなでやって、お手伝いするという昔からある言葉です。五箇山では私たちだけではなく、コーリャク隊ということで都会の人やさまざまな組織の人が入ってきて、農作業などのお手伝いをしています。

「みんなで農作業の日 in 五箇山」という取り組みなのですが、農業公社が主体となって行っています。私たちも7年前から授業で参加しています。

今年は栃餅作りということで、右上のトチの実を石で割るところから始めて、皮をむいて、餅をついています（スライド 12）。地域の方がこうやって大学生を受け入れていただくのは本当に準備が大変で、毎年申し訳ない思いながらも、学生は楽しく参加しております。本当はむいてから、あく抜きやさらして粉にするまで手間が掛かるのですが、そこは地域の方がやったださって、楽しい餅つきを体験しました。

稲刈りです（スライド 13）。これは学生だけではなくて、広く棚田オーナー制度と

して一般に募集しているもので、稲を手刈りして、結い方などを教えてもらっているところです。今は機械で刈るので、こうやって稲を縛る経験がないので、地元の若い人も一緒に方法を教えてもらうような感じになっています。

エゴマです（スライド 14）。これは世界遺産の菅沼です。先ほどの報恩講の料理でエゴマ和えの料理がありました。昔から五箇山で食べられているものです。今は健康食で、エゴマ油といって、小さい瓶で 1000 円ぐらいするような高級食材ですけれども、五箇山では昔から食べられています。

今年はこの収穫をしたのです。当たり前かもしれないのですが、コーリャク隊といって、みんなでやると作業があっという間に終わります。先ほどのトチの実むきも、こんな本当に終わるかなと思っていましたが、10 人ぐらいでワイワイやっているとすぐに作業が終わって、コーリャクはやはりいいなという、素朴な感想を持ちたりします。

貴重な体験をさせていただくことも時々あります。これは薬にするキハダという木ですけれども、すごく大事に育てておられるものを、学生が来たからといって盛大にこうやってむいていただいたりします（スライド 15）。これを煎じると、黒くて苦い薬になるそうです。

棚田の石積みです（スライド 16）。これも楮という集落なのですが、お手伝いをしたりしています。学生がちょこっと来て手伝ったからといって、本当にその地域の役に立っているわけではないのです。むしろ受け入れる側は本当に大変で、準備などを一生懸命してくださって、申し訳ないという感じがあるのですけれども、私たちがこの石積みをやったことがきっかけで、地元の方も「都会から来て、石を積んでくれる物好きがいるのだ」と思ったらしく、この取り組みがどんどん広がって、あちこちから来て棚田の石を積んだり、あるいは復活した棚田で赤かぶを作ったりする活動が広がったようです。

このおばあさんは棚田を昔作っていた方なのです（スライド 17）。お嫁に来たころに川から石を一個一個背負って、持って上がって、積んで棚田にしました。今は使わなくなっていたので、「本当にありがたいね」と言って、ニコニコして見てくださっていて、涙が出るほど感動するというか、喜んでくださっている様子を見ると本当に良かったと思います。

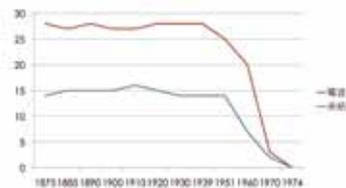
地域の方にいろいろ話を聞けることがこの活動のありがたいところです。この方は小林さんとおっしゃる茅葺き職人で、地域の知恵袋みたいな方です（スライド 18）。カヤの葺き方や、カヤのことをいろいろ教えていただくだけではなくて、その生きざまみたいな、今の若い人には身近でなかなか聞くことができないような、人生についていろいろ教えていただいたりして、非常にためになっています。

以上で五箇山の話を終りたいと思います。もし付け足しなどがあったら、次にお話しされる野原さんに五箇山の話の少し追加していただいてもいいと思います。どう

もありがとうございました。
(拍手)

スライド一覧

合掌造りの棟数の変化
(世界遺産ではない期間)



スライド 1



スライド 2

民家と地域の自然



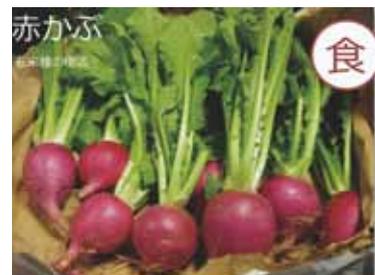
スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7



スライド 8



スライド 9



スライド 10



スライド 11



スライド 12



スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド 16



スライド 17



スライド 18